Ｖｉｔａｌｉｔé インタビュー

指揮者のいないオーケストラ

―自発と協調のハーモニー―

ジュリアン・ファイファー

聞き手：佐多保彦　株式会社東機貿 代表取締役社長

Julian Fifer / ジュリアン・ファイファー
1972年、米国コロンビア大学卒業と同時に、チェリストとしてオルフェウス室内楽団を創設。90年より楽団代表。日本人写真家渡辺奈々さんとの間に一女。
オルフェウス室内楽団は73年、リンカーンセンターでデビュー。82年よりカーネギーホールで定期公演。84年、ドイツグラモフォンと専属契約。これまでに世界40か国、300以上の都市で公演。メンバーの徹底した合議による民主的な運営になる、指揮者のいないオーケストラとして有名。

佐多：オルフェウス室内楽団は今年で創立25周年を迎えられました。その世界コンサートツアーが開始されたわけですが、日本での演奏会は、これでもう6回目ですね。

ファイファー：そうです。初めての日本公演は1988年のことでした。それ以前から、日本に来たかったのです。でも多くの人から、日本の音楽市場はとても難しい、初めての演奏会で失敗すると、二度と受け入れてもらえない、と聞いていました。ですから、ことは慎重に運びました。まず定評のあるCDをいくつか発売し、ある程度人気が出てから、ようやく来日したのです。ところが最初のコンサートで、1曲目を演奏した時、聴衆からの拍手は全くありませんでした。2曲目でもシーンとしていました。我々は「もう駄目だ」と思いました。アメリカでもヨーロッパでも我々は、1曲目から大拍手を受けるのが通例でしたから。けれども、全曲の演奏が終わると、非常に大きな喝采を浴び、2〜3回アンコールを受けました。楽屋に戻り、皆でホッと胸をなでおろしました。日本の聴衆は演奏中は共感を全く示さないで、最後になって熱狂するものか、それが日本の習慣なのか、と思いました（笑）。お国柄というのでしょうか、例えばインドでも音楽愛好家は多く、聴衆が非常に感動してくれていることが分かるのですが、彼らは拍手せずに泣いていることもあります。

佐多：そうですか。日本の聴衆の反応は今でも気がかりですか。

ファイファー：今はおかげさまで、人気も定着し、ファンも増え、1曲目から熱心な喝采を受けています。今回のメンバーは35人で、通常26人の我々としては最大規模です。室内楽団は本来小さなグループですから、大都市の演奏会だけでなく、地方の町のホールにも出かけて行って、様々な聴衆と交流し、日本の文化や習慣の多様性にも触れることができます。これまで、30以上の場所で演奏しています。

佐多：オルフェウス室内楽団は、指揮者のいないオーケストラとして有名ですが、この25年間、一度も指揮者を置いたことがないのですか。

ファイファー：一度もありません。私がニューヨークのコロンビア大学の学生だった1970年頃はベトナム戦争の真最中でした。仲間と「平和のための音楽」というコンサートを開いて、収益金を反戦運動に寄付したりしていました。当時の学生たちにとって、シンフォニーオーケストラは軍産複合体と同じ意味だったのです。つまり、オーケストラの指揮者は最高権威者、いわば独裁者ですから、演奏者は音楽解釈も含め、すべて彼に従わなくてはなりません。我々は自分たちで自分たちのオーケストラを結成し、集団合議による直接民主的な運営をすることにしたのです。演奏者自らがレパートリーを決め、指揮者に従うかわりに仲間の音を聴き、質問し、納得がいくまで討論し、そのうえでリハーサルを重ね、一人一人のエネルギーを最大限に引き出すかたちで、演奏者たちの共同の音楽をつくりあげていくのです。

佐多：オルフェウス室内楽団はニューヨークのカーネギーホールで定期公演し、ヨーロッパでも高い評価を受けているそうです。それは民主的な音楽づくりのたまものですね。後続のオーケストラにも指揮者のいない演奏を望みますか。

ファイファー：そうですね。しかし、指揮者がいるかいないかということは、実は、最も重要なことではないのです。大事なのは、メンバーの一人一人が自分の音に責任をもつことで、誰が優れていて誰が劣っているかとか誰が指導者で誰が追従者かということではない、相互に尊敬しあう雰囲気と共同性を保ち、それによって、より質の高い音楽をつくりだすことこそが大切なのです。

　ただ、最近はあまり議論に時間がかかりすぎることを避けるために、核になる委員会を作り、演奏するレパートリーごとにコンサートマスターや各パートのリーダーを選ぶ方法をとっています。

佐多：シンフォニーオーケストラは「200の手とひとつの頭脳をもった集団」とたとえられるそうですが、すると、オルフェウス室内楽団の演奏はジャズセッションのように、その会場の雰囲気、演奏者の解釈や感情によって、全く違った演奏になるのでしょうか。

ファイファー：リハーサルを幾度繰り返して出てきても、出帆しよ

オルフェウス室内楽団（25周年記念コンサートプログラムより）

写真：永田忠彦

うとする船に急に風が吹くことがあるように、例えば第一バイオリンに何かインスピレーションが働き、それによって普段と違う音を出すかもしれませんね。我々の最大の特長は仲間の音を「聴く」ということでしょう。指揮者がいる場合は、聴いたことより見たこと（指揮者の指示）に従わなくてはなりません。それはソリストも同様です。今まで我々は、バイオリンのギル・シャハム、チェロのミシャ・マイスキーなど多数のソリストと共演してきました。音を聴けば、彼の感情が手にとるように分かります。我々は指揮者ではなくソリストの音に、直接的に、親密に、正確に、柔軟に、しかも受動的ではなく積極的に合わせていきます。

佐多：もしプロの指揮者を招いて演奏するとしても、オルフェウス楽団は彼に合わせることができますか。

ファイファー：もちろん合わせることはできます。今のメンバーだけではできないレパートリー、例えばマーラーやブラームスなどを、指揮者と他の多くの音楽家を招いて演奏するのも面白いと思います。指揮者を選ぶにも、マネージャーではなく演奏者たちが選び、オルフェウス精神にのっとって、あくまで対等の立場でやっていくことは将来可能と思います。

佐多：それは興味深いですね。どんな音楽が聴けるか非常に楽しみです。ところでオルフェウスの音楽のつくりかたがチームワーク研究の対象になり、ビジネスの組織者や経営者の参考に供せられ、あなたは経営者団体の勉強会などに招かれているそうですね。

ファイファー：ええ。1万人くらいの会員がいる、アメリカの経営者協会の年次総会で講演しました。エクセレントな組織を構成し、集団を維持していくために、民主的な原理がいかに有効に働くかというテーマです。オルフェウスはメタファーであり一例であって、あらゆることに応用できるとは限りませんが。

ハーバード大学のハックマン心理学教授は、オルフェウスの音楽づくりと運営の過程をチームワーク研究に役立てています。彼は、組織内のメンバー自身が仕事を企画実行し、同時に仕事の質を高く維持していくという、チームの共同性のあり方を検討するうえで、我々の事例が有益であるといっています。オルフェウスには事実上、他のどの組織よりもリーダーシップが存在する。リーダー（指揮者）がいないからこそ、メンバー（演奏者）たちがそれぞれ皆決定にかかわりをもち、リーダーシップを共有する、と。

佐多：確かに、経営は芸術であるといわれていますが、ファイファーさんも、今はマネジメント中心の活動をされ、音楽づくりはメンバーに任せていると聞いています。

ファイファー：そうです。私は1990年にチェロを置き、今は演奏していません。楽団代表としての役割は父親、母親以上といいましょうか。楽団の世話をし統括する責任、経営の責任、それらは音楽づくりとは分けています。私はコンサート前のリハーサル会場に顔を出し、客席で音を聴いて、色々な指摘をします。それは演奏者のひとりが途中で客席に来て音を聴き、バイオリンはもっと温かくとか、ホルンはもっと柔らかくとか註文をつけ、そうすることによって全体的により良い音色にしていこうとするのと似ています。私は楽団メンバーのひとりですが、演奏者たちが彼ら自身で90％まで音楽をつくってから初めて聴いており、それはチェリストとしてリハーサルに参加していた時とは違います。

佐多：なるほど。結局、指揮者がいるかいないかはひとつの現象であって、オルフェウス室内楽団の目指すものはあくまで音楽の質の高さということですね。

ファイファー：そのとおりです。指揮者なしで演奏することはむしろ易しいことです。演奏曲のビジョンや解釈を共有のものとし、楽団の統一性を保つには、自分の意見をどう主張すればいいか、同僚の言いたいことは何なのか、仲間とうまくやっていくにはどうすればいいかを学び、社会的心理的なテクニックを身につけなくてはなりません。

今後も、自発と協調、開かれた共同性によってつくられる音楽という、我々の演奏スタイルを全世界に伝えていきたいですね。

来年は、大規模なアジアツアーを企画しています。中国を初め、シンガポール、ソウルなどで演奏会を開きます。私が今一番期待を寄せているのは中国で、北京で2回、上海で1回公演します。北京では政府要人や外交関係者が多く来るホールだけでなく、普通の人々が来ることのできる北京大学地区のホールでのコンサートもやります。そこでは学生たちとのワークショップも計画しています。そして作曲家をひとり選び、彼とともに新しい分野に挑戦しようと思っています。